

「ある謹直な会津人のはなし」

増山雄三

会津若松に「秋月悌次郎」という人物がいたが、彼は幕末の乱世に生まれながら、乱世に浮かれるような様な性がなく、そのくせ、最も劇的な職務についていたが、それは、文久三年、京都が最も緊張期にあった時期、会津若松藩の藩外交という実務についていた。そうした、極めて権謀な職掌にありながらも、彼は泰然自若な態度で執務し、敗れた後の明治後も、負けた側として新政府に反発する訳でもなく、その保守的な倫理観の枠の中で、謹直に暮らして、やがて老いていったという、平均的な会津人だった。

幕末、騒然とした京都に、強大な治安機構として、幕府は京都守護職を設け、会津藩主の松平容保に命じてその職に就かせようとしたが、それに対する怯えから、藩は再三これ

を断つたがこれを受けたが、それは後の凄惨な会津藩の運命を、何か予想された。こうした経緯の中で、秋月悌次郎が抜擢され、藩外交を司る公用局を設置し、彼をそれにあたらせたが、それは、他藩の公用方と毎晩酒を飲み、情報交換するというもので、彼がこれに選ばれたというのは、機略縦横の才があつたのではなく、会津藩の中では、多少とも世間を知っていたからだ。た。

彼は、藩校日新館の秀才だったので、十九才で江戸留学を命じられ、昌平黌で十年間も学び、さらに寄宿舎の舎長にもなり、学生身分ながら、幕府から手当まで貰い、知人は全国にでき、世間の狭い会津にとっては魅力的な経験者だし、言葉も奥州訛りが少ない、ということもあつたのが選考の理由になつた。それで、文久三年前半期の京都は、三大勢力が鼎立し、倒幕を露骨に打ち出している長州藩と、この時期、特に英雄的気負いの強かつた保守派の薩摩藩と、それに幕府の正規の

治安機関として、京都に千人以上の兵力を、常駐させ、浪士結社の新撰組を支配下に置いて、いる会津藩とが、それである。

それで、これまでの薩摩藩は、西郷の印象が強くて抗藩的とされたが、彼が流謫されると、攘夷ながらも国内では佐幕で、島津久光が主導し始めると、過激な浪士から見ると得体が知れなくなり、長州の木戸孝允などは、「薩の本意は薩摩幕府を作る事にあるのではないか」と猜疑したほどだ。

後に、久光が引っ込み、西郷が薩摩藩を主導した時も、木戸から見れば、久光から西郷へと投手が交代しただけで、平然と変貌するという奸悪な印象を受けたが、薩摩人は習慣として藩の内部を、決して外部に漏らさないため、機密をすぐ洩らしてしまうような長州人の彼は、不気味に思ったのだろう。

さて、会津藩公用局に籍を置く秋月悌次郎の事だが、会津の京都本営は黒谷の金戒光明寺にあったが、城門のような黒門と、高い石

垣を巡らし、万一の攻防の時には城塞になりうる構えだが、しかし公用局の職員は、大部分の人たちは市中に下宿している。

秋月は、鴨川の畔にあつた三本木に下宿していたが、障子を開けば叡山が見え、夜は水の流れの音がひとときわ高くなり、三本木はいまはそうではないが、この頃は酒樓の町だったので、諸藩の公用方は、主として三本木で会合し、芸者を揚げて遊んでいた。

秋月はそれなりに謹直な男だったが、京で酒樓の町に下宿していた所を見ると、この界隈の雰囲気が嫌いではなかったのだらうが、会津藩は物堅い藩風だったので、長州藩の木戸孝允や久坂玄播の様に、特定の芸者と、深い関係を持つというような事はなかった。

秋月が歴史の表通りに登場するのは、文久三年八月十三日の夜で、舞台は三本木の自宅で、その夜、高崎佐太郎という、見知らぬ一人の薩摩人が、前触れもなく訪ねてきたが、薩摩藩と会津藩は公用方でさえ、それほど

交流がなかったのにである。

高崎は、長州藩とその傘下の過激志士が公卿を擁し、その公卿は詔勅と称するものゝ志士達に与え、幕府を揺さぶろうとしている事を、貴殿はどう思うと問うてきたので、秋月は、彼のいう事を聞いて驚いて、高崎にそれは本当かと反問した。彼はかぶりを振り、それは薩摩藩の藩論でるといった。

翌日、高崎は秋月の案内で黒谷本陣にやっできて、松平容保に拝謁し、薩摩藩の方針をはっきりのべ、薩会同盟を結び、宮廷への工作も、薩摩藩が応援していた中川宮を通じ、かねてより長州きらいだった孝明天皇は、この薩会同盟にのつたのである。

これによって、それまでの長州兵にかかわらず、会津兵と薩摩兵が御所≒かため、同時に長州派公卿は官位をとられ、以降、長州人が「薩賊会奸」と称し、蛤御門の変を起こしたが、西郷が上洛して指揮しこれを治めた。

その後、時勢は変り、薩摩は会津を捨て長

州と結び、慶応四年の鳥羽伏見で、幕府先鋒の会津は、かつての同僚薩摩に破れ、慶喜は江戸へ奔り会津は退けられ、会津盆地に帰った。会津人の悲劇は、この時から始まった。

秋月は、官軍に寛大を乞うため、越後の官軍本営を訪れたが、うまくいかず帰途に就いたが、彼が生真面目だったため、権謀能力を欠き薩摩に利用され、最後になって、慶喜にさえ裏切られた会津藩の哀れさが、敗残の秋月の頬を濡らしたのである。

明治後、秋月は薩長の連中に記憶されている。たので東京に呼ばれ左院議官になったりしたが、官を得るのは忍びないとして職を辞し、六十七才で、熊本の第五高等学校によばれ、漢文を教授し五年続けたが職を止め、その後国に帰り七十七才で没した。

こういう人物が、幕末の会津藩で外交官だった事を思うと、新撰組を使う以外は、殆ど権略的な外交をせず、一見、時勢の中で疎んでしまった、会津の京都守護職というものの

性格の一部が、少し分るような気がする。

秋月は五校在勤中のある日、「薩会同盟」で彼を騙した、宮内省頭官だったあの高崎佐太郎が訪ねてきて、痛飲しながら、同床異夢の話をつつた事が、良い思い出になった。

令和四年五月